

ふうじ

取材メモ

7

移住者たちのアナザーストーリー

今回の取材テーマ

①



「神のもと 遠く姿をあらわせる 巣門の山の 雪乃あけばの」

誰が詠んだかは知れないが、望郷の念が伝わってくる。

明治、大正、昭和と新天地での成功を夢見て、多くの人が北海道へ渡った。語り継がれることもなく、時間とともに消えたストーリーが山ほどあったことを、刈谷田川の鐘つき堂が教えてくれた。

写真、文章／スタジオF(t) 渡部佳則

①鐘は誰でもつくことができる。大きな音が鳴り、周りの山にこだまするので、鳴らすにはちょっと勇気がいる。

②刈谷田川ダム記念公園の中にある「幸福の鐘」と刻まれた釣鐘。

③柄尾を流れる刈谷田川。昔は洪水の度に流路が変わったという。

ふうじ 2022秋号 vol.58

企画編集 ふうじ編集室
発行人 高橋 佑
取材編集 渋川綾子
佐々木聰
写 真 渡部佳則
難波契介
デザイン 斎藤道司(株)ディモルギア
題 字 小林 翠



渋川編集長から「秋号のテーマは、北海道開拓のため移住した県人です」と聞いたとき、ふと頭に浮かんだのが、3年前に撮影した長岡市柄尾の鐘つき堂だった。鐘つき堂は刈谷田川の上流、刈谷田川ダム前の公園に建っていた。「お寺にあるような立派な鐘つき堂が、なぜここに…」。知りたくなって少し下流の柄堀という集落へ下り、外に出ていた男性に訊ねた。「ああ、あの鐘つき堂はダムができる頃、建てられたんだ。昔ここから北海道に移住して、成功した人が寄贈したという話だよ」と教えてくれた。刈谷田川は昔から氾濫を繰り返す暴れ川で、鐘つき堂は洪水で亡くなった人たちの、鎮魂のために建てられたそうだ。

再び鐘つき堂へ戻り、近寄ってみた。「寄贈 伊藤徳治」以下、一族10人の名が刻まれていた。「北海道で成功した人」というのなら調べれば分かるかもしれないと考え、インターネットで検索、あつた、あつた。釧路の148年続く老舗そ



編集後記

今号の特集は、一冊の分厚い本との出会いから始まった。石村義典著『評伝関矢孫左衛門』である。孫左衛門が生涯にわたり書き綴った日記をもとに編まれた、A4版で約900ページにも及ぶ大著で、冒頭に孫左衛門が北越戊辰戦争時に関わった新政府軍派の農民兵隊のことや、西南戦争への出兵の件などが記されていた。が、当時の時代状況に疎いものには、内容が全く理解できず早々に挫折した。それでも、これだけの豪華本を世に問う意味はあるのだろうと思っていたところ、三島億二郎の取材中に、その本が孫左衛門の子孫、関矢信一郎個人によって発行されたことを知る。さらに北海道開拓史の名著とされる『野幌部落史』の著者が信一郎の母、関矢マリ子であったことも知る。この2冊の文献が魚沼市並柳や柏崎市新道をルーツとする名家の一族が、北海道の地域づくりに貢献したことを証明していた。北越殖民社の歴史は終戦直後の農地改革とともに終焉したが、新潟の農民が開墾した農地は、現在もあり、江別市の特産であるブロッコリーやレタスなどが栽培されている。(渋川)

発行所

まごころ印刷の
株式会社 タカヨシ ふうじ 編集室

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS 私たちは新潟の食、文化、風土の伝承を通じて持続可能な開発目標(SDGs)を支援しています。

「ふうじ」はここに置いてあります

【新潟市】中央区>ANAクラウンプラザホテル新潟、駅前オフィスNII GATA、NSG学びステーション、NST、NPO法人 Made in 越後、上古町商店街、旧小澤家住宅、県立自然科學館、砂丘館、佐藤商会、佐渡汽船ターミナル、田中堅本店など工房、朱躑々美、新潟絵屋、新潟 加島屋本店、新潟県政記念館、新潟県庁広報展示室、新潟県民会館、新潟国際情報大学、新潟中央キャンパス、新潟市市民活動支援センター、新潟市生涯学習センター、新潟市食育・花育センター、新潟市中央図書館、新潟商工会議所、新潟市歴史博物館、新潟ユニゾンプラザ、ピアBandai、ホテルイタリア軒、ホテル日航新潟、りゅーとひあ新潟市民芸術文化会館<東区>桑名病院、パティスリー・カフェル・アレン、<西区>新潟ふくさと館、新潟大学附属図書館、佐潟荘 <南区>新潟せんじい王國、ヒューフ島潟、新潟空港、川内自動車、新津鉄道資料館【新潟市】加治地区公民館、紫雲寺地区公民館、新發田市生涯学習センター、新發田市文化会館、新發田市立図書館、農浦地区公民館【聖籠町】聖籠観音の湯ざぶる【村上市】イヨボヤ会館、村上市観光協会【長岡市】新潟県立歴史博物館、長岡市立科学博物館、長岡大学、長岡市立中央図書館、やまとし復興交流館おたら【燕市】分子ビズターサービスセンター【出雲崎町】越後出雲崎天領の里【湯沢町】曾国觀光舍 越後湯沢温泉【南魚沼市】桜苑【佐渡市】SADO伝統文化と環境福祉の専門学校、ホテル大佐渡、佐渡市立図書館【東京都】
【渋谷区】表参道・新潟ネスバーズ【中央区】ブリッジにいた【千代田区】新潟市東京事務所【江東区】表参道・新潟ネスバーズ【中央区】ブリッジにいた【千代田区】新潟市東京事務所

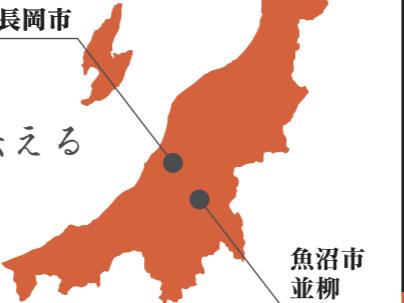
本誌に掲載されている写真等の無断転載はご遠慮ください。

エコプレス
バイイング
RICE INK

針金・糊・加熱が不要な
製本方法を採用し、
リサイクルや怪我の危険へ
配慮しています。

この印刷物は環境にやさしい
米ぬか油を使用したライスインクで
印刷しています。

想い | つくる | 伝える



[F u u d]
2022
秋号
—季刊—

北海道の越後村

2022 Eye's
新潟ここだけ物語

ふうじ



Take Free

ご自由にお持ちください

北海道の石狩平野の一隅に、越後村という地名がある。明治19年(1886)、新潟の北越殖民社が入植した地区である。その会社のキーマンのひとり関矢孫左衛門が9代当主を務めた魚沼市並柳にある関矢家の蔵。三棟の蔵がひとつの屋根で覆われている。この穏やかな里山の風景こそ、孫左衛門が終生追い求めた農を根本に据えた地域づくりの原点だったのかもしれない。

がんばろう ● ニッポン!

明治のなか頃、長岡にフロンティア精神に燃える起業家たちがいた。彼らが集結し、北海道開拓をめざす北越殖民社が設立された。

模範的な発展経過をたどり、野幌原始林の保存にも大きく貢献した。

百年先をイメージできたか

想い 北の大地にどどめた農魂

明治の挑戦者たち

北越殖民社は、いまから一三六年前の明治十九年（一八八六）に、長岡地域の旧藩士・大地主・商人たちにより設立された。事業の中核者は、北海道開拓の重要性を説いた大橋一歳と、その志に共感した三島億二郎、関矢孫左衛門、岸宇吉、笠原文平など、いずれも時



代の先を読めた地域の有力者である。三島の自宅を本社とし、旧北越銀行の前身、六十九銀行による資金的支援を背景に、当時、多くの人から冒険的すぎると言われた、北海道の集団開墾事業がスタートした。一方、現地北海道では旧長岡藩士で札幌農学校長の森源三、月形町の樺戸集治監で鉄道や道路のインフラ整備を率いた高野譲など長岡出身の実力者たちが事業をサポートした。ちなみに高野も旧藩士で、山本五十

六の長兄にあたる。
はじめに石狩平野の幌向郡江別太の一画を入植地に定め、試験的な開墾がスタート。現在の江別市江別太にある越後村である。起業と同じ年の明治十九年（一八八六）五月、新潟からの十戸の農民が入植した。そして四年後に、越後村にほど近い野幌^{のっぽろ}に、九十四戸の新潟の農民が移住し、社としては最大規模の団体開墾事業が始まる。野幌の開拓村は、後に民間による開拓事業として村の結束力や農業技術の高さなどで注目されるようになる……と多くの資料や書籍に紹介されている。が、北海道の地理をよく知らないものには、現実を思い浮かべることは難しい。

そこに強力なナビゲーターが現

れた。敬和学園大学人文学部教授、一戸信哉さんである。かつて北海道の大学で教えていた経験があり、母方の曾祖父が出雲崎から北海道に移住した家系から、一戸さ



野幌森林公園内にそびえたつ高さ100mの「北海道百年記念塔」。完成から半世紀が過ぎたが、構造体の老朽化により解体されることが決定している。

時 石狩平野の開拓史のなかで、その名を聞いたり目にしたことがあつたのですが、詳しく知りませんでした。新潟に赴任してきた機会に、どんな会社だったのか調べようと思つたんです。ところが、どこの資料館を訪ねても、さほど詳しい展示はなく、地元の長岡でさえ、社名の紹介があるだけで移住後にどのような経過を辿つたかなど詳しい説明がなかつたのです。これは、どういうことなのかと思議に思つたことが発端です。移住に対する北海道と新潟の意識の違いなのか、県外に出た人に関心が向かないのか。いずれにしても自分で調べようと思い、会社設立の経緯や移住後の経過を調べ、その確認のために現地に行つたのです」続けて「フロンティアとしての可能性を秘めていた北海道は、明治初頭から全国各地の移住者によつて開拓されてますから、それが土地にストーリーがあります。でも時間的なギャップで、後々の人がそれを知らないのです。移

住の物語は、出身地の風土や歴史や移住にいたる背景などを知り、またどんな苦労があったのかを知る貴重な情報源ですので、できるかぎり自分の足で掘り起こしていきたいです」と一戸さんは北海道と新潟の関係性を探る意味を説く。確かに越後村の現在を教えてもらい、文字だけで理解していた歴史が生き生きと動きだした。

開拓村の大事件

を掲らし、敵のよきな喧嘩をあげてゐる。覚悟を決めてきたものの開墾作業は想像以上に過酷だった。漆黒の闇に包まれる夜は、近くに人がいない寂しさで家族抱き合つて泣いた。それでも北越殖民の社員の励ましで気持ちを立て直し、「一日一日を激しい労働で費やし、先の不安を打ち消しつゝ過ごした。こうして入植から十年後、洪水や干ばつなどに遭いながらも、一戸に割り当てられた五町歩の原野は畑に変わり、水田もでき始め、翌年に開村十年祭を盛大に催せるほどになっていた。

しかし突如、開拓村の存亡に関わる重大事件が起きた。開拓事業をさらに加速させようと、北海道庁は野幌丘陵の原始林を御料林から官林に移管させ、丘陵をとりまく市町村に分割管理させる計画を行った。前触れもなく発表。その計画が通れば近い将来、原始林が消滅することは目に見えていた。それは稻作の水源涵養林がなくなるだけではない。石狩湾から吹きつけ

とを危惧した関矢は、入植地が隣居寸前の長官を追い駆け直談判する強硬手段に出る。そして計画の発表から九日目、奇跡的に長官の居場所を突き止めた北広島の和田郁次郎は、休憩所に押し入り計画撤回を強硬に申し入れる。

長官はその執拗な行動に激怒しながらも、分割計画を白紙に戻すことを、その場で決定。こうして百年、二百年までイメージできた開拓農民の深い知恵と迅速な行動により、野幌丘陵の原始林が残った。



北越殖民社が入植者のために用意した、屋根も壁も竹で作られた住宅。



江別市教育委員会発行の「野幌原始林物語」(手前と、磯部定治による「情熱の人 関矢孫左衛門」(2007年 新潟日報メディアネット出版部発行)

んは北海道に明るい。越後村にも二回訪れている。

いまの越後村について「村がある江別市は、札幌市の隣町で、新潟市と新発田市のような位置にあります。その江別市の郊外に広がる農村と住宅街が混在する地区の、静かな一画に越後神社と越後会館、〈殖民社〉のバス停が残っています。祭りや集会で村民の心をひとつにし力を合わせて村を作ろうとしたことがわかりました。神社の近くには村の記念年が巡ってくる度に建てられた記念碑がいくつかあり、それぞれの時代性を映しながら、村の歴史を語っています。それらの文面と石碑の豪華さから、原野を切り拓いた開拓村であることの誇りと、父祖たちの労苦を忘れまいとする強い意志が伝わってきました。新潟の人が、その場に立つたら、きっと熱いものが込み上げてくるでしょうね」と一戸さんは語る。

でも、どうして北越殖民社に興味をもったのか。「北海道にいた

A portrait of a middle-aged man with grey hair and glasses, wearing a striped shirt. He is sitting at a table with his hands clasped. A smartphone is visible in his pocket.

平成10年代の野幌の風景(上)と、江別太の越後村の様子(下)。(撮影 古田島吉輝)

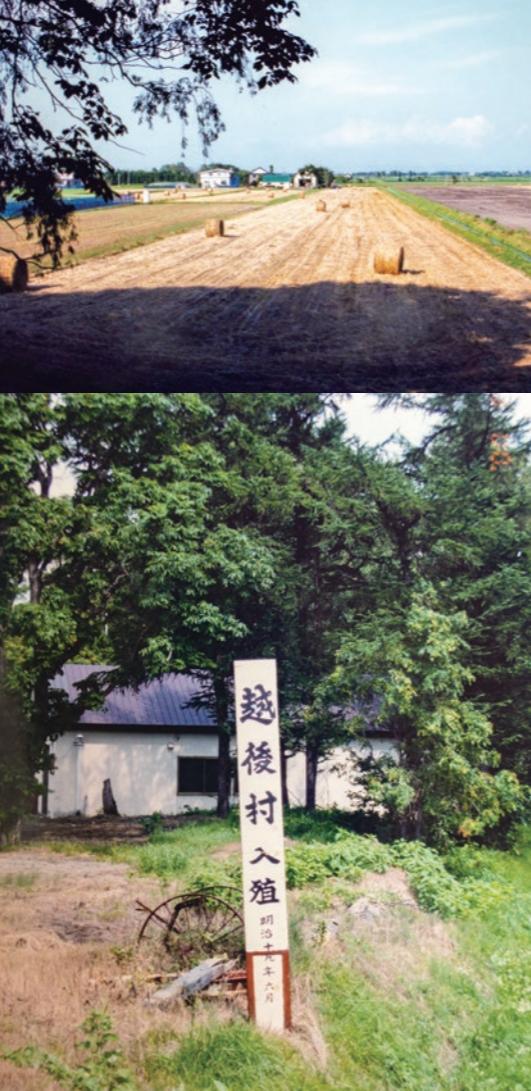
長岡復興の恩人として知られる三島億二郎は、北越殖民社のキーマンのひとりでもあった。今年、令和四年は三島の没後三十年にあたり、昨年発足した三島億二郎の功績を広く伝える顕彰会では、生涯をまとめた本の出版準備に追わっていた。会の代表、旧長岡藩主牧野家十七代当主牧野忠昌さんに話を伺う。牧野さんは三年前、晩年の三島が力を注いだ北越殖民社の入植地がある江別市を訪ね、三島の思いを記憶

長岡から北海道へ視点を移したのか。

の長岡から北海道へ視点を移したのか。

三島の晩年の日記を読み解き、長岡市史双書として発行する事業に関わった一人、古田島吉輝さんに、その疑問を投げかけてみた。古田島さんは「ほんとうは長岡空襲が専門なんですが」と前置きし、日記から浮かびあがる三島の心を語りはじめた。「北海道開発に向かう直接的な動機は、事業を発案した大橋一歳の遠大な構想と情熱に出会ったことです。それは自分たちが北海道に移住し国土を開拓し、力者たちとの親交を通じ、開拓事業の国家的意義を痛感してましたから、自分も何とかしたいという気概を秘めていたと思います」。

しかし本格的な入植事業が始まるとした矢先、大橋が事故で急逝。それまで事業全般を担つていて大橋の代わりに、三島が事業の



開拓地で、交通インフラも不十分で、汽船など精力的に動いています。当時の北海道は、一度渡つたら戻って来れない今まで言われた未せん。明治十五年から六回にわたり北海道に渡り、入植地の状況を自分の目で確かめ、北海道庁との交渉など精力的に動いています。それでも、ほとんどが徒歩で移動しています。それは北海道に限らず、上



前面に出るようになる。
その熱量を物語る話を古田島さんが教えてくれる。「北海道庁の開墾助成金の支給要件から、翌年の春まで二百戸の入植者を集めないといけないと差し迫った時、三島は長男の三島徳蔵を伴い古志郡と三島郡の山あいの村々を、雪で難渢しながらも訪ね歩き、寺院や学校に集まつた村人たちに移住条件を説明し参加を呼びかけていました。その募集活動は驚くほど広範囲にわたり、しかも短期間に集中しています」。その時、三島はすでに六十四歳。「それだけではあります。明治十五年から六回にわたり北海道に渡り、入植地の状況を自分の目で確かめ、北海道庁との交渉など精力的に動いています。当時の北海道は、一度渡つたら戻って来れない今まで言われた未

京する時も、中越地区の山深い村々をまわる時もおなじです。ですから三島は長岡の誰よりも長距離を移動し、誰よりもたくさん歩いた人でした」。

後日、江別越後会長の川村恒宏さんに電話で話を伺った。川村さんのルーツは佐渡の小木。大正三年前を振り返る。宏さんには電話で話をするのが苦手なところ、江別越後会長の川村恒宏さんは、「ほんとうは長岡空襲が専門なんですが」と前置きし、日記から浮かびあがる三島の心を語りはじめた。「北海道開拓に向け普普通に生活ができる世界です。それを裏づけるように、入植者に心に温かい眼差しを向けています。生涯で最後の北海道行きになった時は、故郷より遙かに寒い入植地で、初めて冬を越す農民たちに寄り添いたいと、十一月の荒れる海を渡っています。結果的に極寒のなかで病を得、札幌の病院に入院します。その直前ですら、新築する瑞雲寺を子どもたちの学習場としても兼用できるよう設計

解けなかつた謎

三島は、どんな世界をめざしたのか。

「庶民が真面目に働き、働いた分だけ普通に生活ができる世界です。それを裏づけるように、入植者に心に温かい眼差しを向けています。生涯で最後の北海道行きになった時は、故郷より遙かに寒い入植地で、初めて冬を越す農民たちに寄り添いたいと、十一月の荒れる海を渡っています。結果的に極寒のなかで病を得、札幌の病院に入院します。その直前ですら、新築する瑞雲寺を子どもたちの学習場としても兼用できるよう設計



九銀行など現在の基礎になる様々な事業を起業していますが、事業が軌道にのる前に、次の事業を構想し準備を始めていますね。その精神性は先進的という言葉で言い表せない、もっと高い理想があつたのではないかでしょうか。

「米百俵」の小林虎三郎の元で陶を受けた人ですから、人間の可能性を信じ、未来を変えようとする強い信念があつたように拝察されます。

現地を案内してくれた江別越後会について「入植者の子孫の方々は、三代四代になつていましたが、わたしたちが開拓したんだ、ここでずっと苦勞し困難を乗り越えてきたからこそ、現在があるのだとお話を聞かないと、わからなかつた熱い感情でした」と牧野さんは三年前を振り返る。

宏さんは、「ほんとうは長岡空襲が専門なんですが」と前置きし、日記から浮かびあがる三島の心を語りはじめた。「北海道開拓に向け普普通に生活ができる世界です。それを裏づけるように、入植者に心に温かい眼差しを向けています。生涯で最後の北海道行きになった時は、故郷より遙かに寒い入植地で、初めて冬を越す農民たちに寄り添いたいと、十一月の荒れる海を渡っています。結果的に極寒のなかで病を得、札幌の病院に入院します。その直前ですら、新築する瑞雲寺を子どもたちの学習場としても兼用できるよう設計

時代、お祖父さんが小樽に移住してきたという。会の活動について「いまはコロナで休止状態ですが、北越殖民社の歴史や、長岡の歴史の勉強会を開催し、長岡を訪問したこともあります。現在の江別市は札幌のベッドタウンとして人口十二万人を抱える都市になります。関矢孫左衛門のご子孫で、土壤学の研究者だった信一郎さんも、この夏に亡くなられ寂しくなりました」。それでも「新潟は、わたしたちの故郷です」とスマートフォンから弾んだ声が聞こえてきた。川村さんの話から、江別市と長岡の関係性が現実のものとして見えた。牧野さんが長岡市と江別市が姉妹都市になることを強く望む気持ちが、ようやく理解できた。



三島億二郎顕彰会のパンフレットなど、たくさんの資料を準備し取材に臨んでいただいた牧野忠昌さん。長岡市民になったお殿様として、牧野家と長岡藩の歴史を現代に伝える活動を精力的に行っている。

つくる 情熱の原点

起業成功の秘訣

する史跡をめぐった経験がある。現地から見えた三島の人物像をこう語る。





寺社彫刻の極致、透し彫りの葡萄と躍動感あふれる波頭。(白山神社社殿)



白山神社の社殿と本宮祭の神事の様子。社殿は文化2年(1805)に開矢家四代当主、孫三郎により再建。平成16年(2004)の中越地震で土台が傾くなどの被害を受けたが現代の名匠により往時の華麗さが蘇った。(魚沼市指定文化財)



巢守神社の脇から見えた並柳の風景。

インフォメーション

三島億二郎顕彰会

〒940-0036 長岡市愛宕2-2-3(世話人 飯高潤)
TEL 090-5790-7052

読者の声 ~前号を読んで~

地元で感じる世纪の大工事

あたらめて大河津分水路の特集、読み応えがありました。地元の人間としては、新しい工事により見慣れた風景が変わっていく寂しさと、世纪の大工事を目の当たりにできることの静かな感動を日々感じております。

(長岡市 40代女性)

大河津分水路以前の記憶

私が住んでいる長岡市今井は、信濃川の支流である太田川と浄土川が合流する三角地にあり、昔から水害に悩まされてきた地域です。そのため昔は、全国的に珍しい輪中といふ土手に地区が囲まれていました。そして当地区も、隣り合う大宮も、神社の社はお墓のような頑丈な石造りになっています。

(長岡市 70代男性)

お堂を見せていただいた翌々日、白山神社の本宮祭があるというので、無遠慮を承知で祭に参列させてもらう。神事の前に、宮司の山之内順昭さん、関矢良憲さん、山之内修さんと奥様の光子さんに話を伺う。

まず孫左衛門について「地元を救った旦那さままで、思いのある人が当地に来て、割元庄屋になり、代々私財を投じ地域の発展に尽くしています。ただ関矢家より百年ほど前に移住してきた家があり、並柳開村の祖として一目置かれていました」。その家は、南会津を治めていた戦国武将の山内氏の一族で、伊達政宗との戦いに敗れ、六十

里越を越えて並柳に逃れてきて定住したという。その末裔である山之内修さんは「新築する前の屋敷にあった蔵には、弓や槍、提灯のほか、古文書がいっぱいありました」と言葉を添える。さらに関矢家の隆盛ぶりを伝える話として「お屋敷は間口が広く、草葺きの大きな屋根をのせた豪壮なものでした。風呂が大きく、十時頃から炊き始め、夕方によくやく沸きあがつたという話を村の年寄りからよく聞かされました。また酒造業を営んだ時代もあり、いまある蔵とおじものが二～三棟あったように記憶しています」と次々に地元ならではの話が披露されるうちに、神事の開始時刻が迫ってきた。

おなじシーンを味わうことができた。帰り際、もう一度あたりを見渡す。青空の下に生氣を湛えた低い山々が横たわり、孫左衛門が終生愛し、北海道で思い描いた風景が、そこに広がっていた。

北越殖民社の歴史は、北海道と新潟の距離を縮めるだけでなく、遠くなつた明治の新潟を、明瞭な事實をともない現代に引き寄せてくれた。ちなみに明治中期から大正末期まで、新潟県から北海道に移住した戸数は全国で三番目に多かったという。



まるで辻講釈師のように並柳の歴史を得得と語ってくれた宮司の山之内順昭さん。



文政13年(1830)5月に建てられた白山神社の鳥居。
関矢家4代当主の名前が刻まれている。

卓越したリーダー
北越殖民社のもうひとりのキーマン、関矢孫左衛門も熱い人だった。急逝した大橋一藏の遺志を継ぐために、四十五歳で魚沼地域の行政の長を退き、入植地に腰を据え、卓越したリーダーシップで開拓農民を率い事業を発展させていた。その代表的な功績が前々項でとりあげた野幌の原始林保存の活動である。

関矢さまのお膝元

伝える 陰徳の系譜

頼りに訪ねてみた。そこは、かつて広神村と呼ばれた地域である。



第1回衆議院議員選挙に当選した頃の開矢孫左衛門。この時、すでに北海道の入植地に赴いている(関矢孫史 提供)

一貫して事業の目的は利益追求ではなく、入植農民の自立支援にあるという姿勢を崩さなかつた。そのため長岡の出資者と緊張する場面もあつたが、最終的に実家である柏崎新道の資産家、飯塚家との親族らに北越殖民社の事業が引き継がれ、孫左衛門の夢は潰えることはなかつた。

明治維新的混迷期に自ら農兵隊を結成し、新政府軍を支えた尊皇の志士でもあつた孫左衛門。いったいどんな人だったのか。孫左衛門が九代当主として家を継いだ開矢家がある魚沼市並柳を、ある日、地図を

並柳は魚野川の支流、破間川の右岸にある盆地に集落を置く、奥深い歴史を感じさせる地区だつた。細い村道を行くと集落の外れに、手入れの行き届いた巢守神社があつた。石燈籠や狛犬の台座には開矢家ゆかりの名前が刻まれ、あることを教えていた。神社の脇の細い用水路には、透き通つた水が勢いよく流れくだり、少し間を置き只見線の線路が敷かれ、福島県と県境を分ける山々の方に伸びていた。その穢れのない優しい山里の風景に現代を忘れた。

昭和のままに佇む商店で、もうひとつ神社、白山神社の場所を尋ねる。すると奥様は現地まで案内し、「遠くから来たんだから神社を見てあげて」とお堂を管理する人に頼んでくれる。しばらくして、鞆堂の扉が開け放たれた瞬間に、目の前を流麗な彫刻が隙間なく施された小さな社殿が塞ぐ。思わず声を上げた。「凄い彫刻でしょ。こんな山の中に魚沼一の宝物があるんですよ。この神社は開矢さまの家の鎮守さまで、開矢さまが再建したものですね」と熱っぽ

く語る。確かに風雨から社殿を守つて、いる鞆堂のお陰で、建造から二百年の月日を経ても、彫り師の腕を冴え冴えと残し、自然界の命を活写していた。先の巢守神社も開矢家の再建だという。それらの神社の風格に触れただけで開矢家の財力と崇敬心の篤さを理解する。

親から聞いていた話として「開矢さまは、飢饉で苦しむ秋山郷にたくさんの救援米を送つたり、ここでお粥を施したり、代々慈悲深く施された小平尾」という集落に、ひつつの神社、白山神社の場所を尋ねる。すると奥様は現地まで案内し、「遠くから来たんだから神社を見てあげて」とお堂を管理する人に頼んでくれる。しばらくして、鞆堂の扉が開け放たれた瞬間に、目の前を流麗な彫刻が隙間なく施された小さな社殿が塞ぐ。思わず声を上げた。「凄い彫刻でしょ。こんな山の中に魚沼一の宝物があるんですよ。この神社は開矢さまの家の鎮守さまで、開矢さまが再建したものですね」と熱っぽ